「御法さま」考―人法一箇と法面人裏

西　山　　茂

はじめに

本論は、門流や教団の形成あるいは形相維持に大きく寄与してきた「教学の論理」と、日々の生活課題と格闘すべく受益を求めて何らかの宗教的権威（～さま）に頼らざるを得ない「民衆（信者）の心意」（心理的性向）との間にある重なりとズレに着目し、本門佛立宗や浄風会の信者（おそらく八品門流の総て）の間で使われている「御法さま」という言い方の問題について一考するものである。

なお、この問題は、社会学的な機能主義の立場からいえば、社会システムの型の維持として機能する「文化」と、それとは関係なく変動する日々を生きている人々の不定型な想念（心意）との間のささやかな関係の問題でもある。

筆者には一介の社会学徒が門外漢の教学がらみの問題に手を染める後ろめたさもあるが、逆に、素人だからこそできる思わぬ教学的な貢献があるのかも知れない。

１．妙法曼荼羅と「人」・「法」

日蓮教学界では、日蓮法華宗（日蓮宗諸派）の本尊は法本尊（妙法曼荼羅またはその中尊の南無妙法蓮華経）なのか、それとも人本尊（仏本尊）なのかの論争が昔から喧しい。日蓮遺文のなかに、「法華経の題目を以て本尊とすべし」（本尊問答抄・真跡なし）という文言と、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」（報恩抄）という、一見、相矛盾する文言が並存しているからである。

しかし、報恩抄のこの文言のあとに「所謂宝塔の内の釈迦多宝外の諸仏並に上行等の四菩薩脇士となるべし」という文言が続くから、この場合の「本門の教主釈尊」が妙法曼荼羅中尊の南無妙法蓮華経を指していることは明白である。すると、日蓮は本尊を、ある時には「南無妙蓮華経」と法格的に言い、別の場合には「本門の教主釈尊」と人格的に言っていることになる。

だが、報恩抄の「本門の教主釈尊」（妙法曼荼羅中尊の南無妙法蓮華経）が久成釈尊（山川智応的には妙法と「冥合一如」した始成仏の存在）を意味しているのか、それとも本覚仏（山川智応的には妙法と「不二一如」の無始の存在）を指しているのかについては、これだけでは分からない[(1)]。

もっとも、本覚仏にまで論を進めると、本仏は三身即一とはいえ、それをインドのシャカ族に由来する「釈尊」の名で呼んで良いのか、それとも「寿量品の仏」とか「寿量仏」

と呼んだほうが良いのではないか、という別の問題も生ずる。

それはともかく、総じて、勝劣派（法華宗の本・陣・真の三門流や冨士門流など）は妙法曼荼羅を本尊とし、一致派（身延・池上・中山等一致派諸門流の集合体としての日蓮宗など）は久成釈尊を本尊としている、といえる。

もっとも、一致派を基本とした日蓮宗が臨滅度時の妙法曼荼羅（真跡）を檀信徒向けの宗定本尊としていたり、勝劣派の冨士大石寺が「人法一箇」(2)（「法」の南無妙法蓮華経と「人」の久遠元初自受用報身との一箇）の立場から末法の日蓮を本仏としているなど、両者の間にはかなりの多様性がみられる。

いっぽう、勝劣派に属する八品派は、「妙法蓮華経は久遠の釈尊、三世諸仏の師」（慶林坊日隆『二帖抄』）であり、仏教はそもそも真理（法＝ダルマ）信仰であるという立場(3)から、妙法曼荼羅（またはその中尊の南無妙法蓮華経）を本尊としている。すなわち、八品派の本尊は「法」としての妙法曼荼羅であるが、妙法を覚ってそれを信受したとされる「人」としての久成釈尊も本仏として立てている。

しかし、それは法面人裏の上の人裏の本仏であって、本尊はあくまでも妙法曼荼羅の法本尊である。八品派には、「他の日蓮門下の大部分は釈尊本尊を立て」(4)ているのに自派だけは違う（あくまで「法」を本尊にしている）という自負がある。

なお、八品派から分かれた本門佛立宗や浄風会も、この点では、法華宗本門流等と基本的に同じである。

2.「御法さま」という表現

ところで、八品派の流れを汲む本門佛立宗や浄風会など（おそらく八品門流の総て）には、「御法さま」という言葉がある。「御法さま」とは、妙法曼荼羅（あるいはその中尊の南無妙法蓮華経）をさす言葉である。「さま」がついているから「人」としての久成釈尊のことかと思うとそうではなく、彼によって覚られそれを信受した「法」としての妙法曼荼羅もしくはその中尊の南無妙法蓮華経のことを指している。真理を意味する「法」に「さま」をつけるのは不自然ではないかといっても、信者やその心意を汲んだ教団が「法」を擬人化して「さま」扱いにする事実はたしかにあるのである。

そうすると、大石寺のいう人法一箇（戒壇本尊を人法に開く）と同じようにみえるが、そうではない。大石寺では、人法一箇の「人」を久遠元初の自受用報身＝末法再誕の日蓮に求める。ところが、八品派では、後述するように、「人」の久成釈尊は妙法曼荼羅中尊の総名・南無妙法蓮華経（法）のなかに含まれる、と考えるのである。

「さま」は、アニミズムの伝統のある日本では不思議なもののすべてにつけられる。巨木や狐狸の類も、ここでは「さま」を付けて呼ばれうる。仏教では、通常、人格をもった者（仏菩薩など）につける尊称であるが、佛立宗や浄風会（おそらく八品派の総て）では

明らかに妙法曼荼羅かその中尊の南無妙法蓮華経のことをいっている。

八品派の教学者が真理信仰にいかに固執したとしても、それについていく民衆（信者）や彼らと同じ立場の教団が「法」を「さま」を付けて擬人化するのである。

筆者は、不思議に思って、2014年の11月26日に尼崎の興隆学林専門学校で行われた『シリーズ日蓮』（全五巻、春秋社）刊行記念の第三回シンポジウムの終会後に、佛立宗の福岡日雙住職（神戸香風寺住職）に尋ねたところ、「妙法曼荼羅は人格化されているから」ということであった。また、浄風会の泰永二郎会長は、浄風会が紙墨の妙法曼荼羅を「御法さま」と崇める理由は、それに一切衆生を一人残らず幸せにしようという強い意思（慈悲）があるからだ（『JOFU』2018年10月号）、といっている。

福岡住職の言についていえば、「法」はそれを覚ってそれを信受した久成釈尊によって人格化されているのだと筆者なりに理解したが、内心、充分には得心がいかなかった。大石寺系の教団や充洽園学派のように、「法」の妙法曼荼羅中尊をただちに「人」（大石寺では久遠元初の自受用報身、充洽園学派では本覚仏）と人法一箇的に読めば理解しやすいが、八品派系の教団にはこうした人法一箇の考えはないから、福岡住職の説明にはいまひとつ理解しがたいところがあった。

充洽園学派に触れたので、この辺で、人法一箇的な読み方のもうひとつの事例を紹介しておこう。それは、たとえば次の二師の考え方である。つまり、日蓮宗の一妙院日導（綱要導師、1724-1789）や優陀那日輝（充洽園学派の祖、1800-1859）のように、妙法と本覚無作三身の教主釈尊との一箇をいう場合[5]である。この場合は大石寺のように日蓮本仏論にはなることはないものの、実修実証（有始無終）の寿量品文上の久成釈尊の奥（文底）に無始無終（常住）の本覚仏を認めることになるので、本覚仏を認めない立場の今日の日蓮宗系の多くの教学者たちの公認するところではない。

「無作三身」や「本覚仏」という用語は、日蓮の真跡遺文にはなく、中古天台教学の影響のもとに、後世、偽作された可能性が高いとみる日蓮教学者が少なくない。だが、観心本尊鈔の「五百塵点乃至所顕の三身」のなかの「所顕の三身」の解釈次第では、本覚三身仏の存在を認めざるを得なくなるかも知れない。

話は違うが、大石寺のいう久遠元初の自受用報身は実修実証の時期を五百塵点劫のむかしに成道したとされる久成釈尊よりも一歩早めて、「久遠元初」に修証した仏としているが、それでもそれが実修実証の有始無終の存在であることに変わりなく、常住性の点では本覚仏には遠く及ばない。

もっとも、大石寺のいう自受用報身を創価学会のように根源的な「宇宙大生命」として生命主義[6]的に捉えるとすれば常住性は保てるだろうが、今度は「久遠元初における自受用報身の（実修実証の）覚り」をいう大石寺の伝統教学との間に齟齬が生じてこよう。

3．大石寺の人法一箇の戒壇本尊

大石寺は妙法曼荼羅を本尊にしているが、妙法曼荼羅一般ではなく日蓮が一閻浮提（全世界）の衆生救済のために弘安二年十月十二日に特別に図顕したとされる戸板大の妙法曼荼羅（偽作説もある）を本尊としている。この本尊は楠板に彫られているが、日本が広宣流布された暁には国家に外護された戒壇堂の本尊になると信じられているところから、広く、戒壇本尊といわれている。

これとは別に、大石寺には、種熟脱の三益法門を用いて、久成釈尊を「本果妙・脱益の教主」として下し、代わって、久遠元初の自受用報身とその末法再誕の日蓮を「本因妙・下種益の教主」（本仏）として仰ぐという伝統があった。

そして、戒壇本尊こそ、南無妙法蓮華経という「法」と日蓮（久遠元初の自受用報身の末法再誕の本仏）という「人」の二つが一箇したものであるというのが人法一箇の論理である。つまり、人法の二つの権威が戒壇本尊という事物のなかに封じ込められていて、それが大石寺にしか存在しないということである。大石寺の教学が、筆者らによって「印籠教学」といわれるようになった所以である。

なお、創価学会が大石寺に属していたころ、この戒壇本尊のことを「幸福製造機」（この本尊の授益機能の戸田城聖的な表現）といい、当初、この本尊を掲げる「国立戒壇」を建てるために国政に進出した（言論出版妨害事件後の1970年５月に否定）ことは、あまりにも有名である。

ところで、大石寺の法華講員や創価学会員は、自宅に奉迎した法主書写の紙墨の戒壇本尊のことを何と呼んでいたのであろうか？　彼らは、この本尊のことを「御本尊さま」と呼んでいた。だが、彼らがこのように呼ぶときに意識していたものは書写された紙墨の本尊ではなく、そこに秘められている人格的なもの、より具体的にいえば末法の本仏の「日蓮大聖人」その人であった。

そして、これを支えていた教学が人法一箇であった。つまり、木画二像成仏（観心本尊抄）の原理によって既に神秘化されている紙墨の「御本尊さま」は、さらに末法の本仏＝「日蓮大聖人さま」に昇格したのであった。もっとも、大石寺の法主や創価学会の三代会長が心情的にこれに代わることがあったかも知れないが、どのみち、大石寺の「御本尊さま」の人格性自体には疑問の余地はない。

なお、大石寺と決別した最近の創価学会は、2014年11月の会則変更で、これまで信受してきた大石寺の戒壇本尊を今後は「受持の対象としない」ことに決めたが、これを完全に否定したわけではない。

4．八品派の法面人裏の妙法曼荼羅

いっぽう、八品派には、大石寺のような人法一箇の発想はないが、総名の南無妙法蓮華経（妙法曼荼羅の中尊）という「法」のなかには「人」の久成釈尊が含まれているという法面人裏の教学はある。

しかし、仏立宗や浄風会（おそらく八品門流の総て）の信者が妙法曼荼羅に向かって唱題するときに、あるいはそれに受益を求めるときに、まず思い浮かべるのは、妙法曼荼羅の中尊の南無妙法蓮華経であって、久成の釈尊ではあるまい。八品派の教学では前者は後者を含むが、言表するときはあくまで「法」に敬意を表する「御法」が限度なのであろう。だが、民衆（信者）はそれを擬人化して、「さま」まで付けようとする。

ちなみに、八品派の教学では、門祖の慶林坊日隆（1385–1464）以来、上行菩薩を久成釈尊の因位と解して、この本因の上行と本果の釈尊の無限のループ（繰り返し塵点）によって本仏の無始無終性（常住性）を担保する[7]。有限の無限ループは無限である、という論理である。この無限のループの主役は本因上行（九界代表）と本果釈尊（仏界代表）であるが、興味深いことに、八品派では門祖から今日まで、この上行と釈尊を同体異名の仏の因果二側面（一仏二名）と捉えていることである[8]。

八品派は、これによって、本仏の実修実証性と常住性の双方を入手したことになるが、いっぽう、このような細工をしなくても五百塵点という実数に拘らなければ（経の真意が文上の実数に寄せて文底の無始を示すところにあると解せば）本仏の常住性が担保できるのではないかと、いう望月歓厚の批判[9]もある。

むすび―教学の論理と生活者の心意

紙墨の妙法曼荼羅（またはその中尊の南無妙法蓮華経）を「御法さま」と呼ぶ日蓮遺文的な根拠は、門流を問わず、「詮ずる所は一念三千の仏種に非ずんば有情の成仏・木画二像の本尊は有名無実なり」（観心本尊抄）あたりであろうが、それ以外に、我々は民衆（信者）の心意とういうものを非教学的に考える必要があるであろう。

つまり、比較的一貫性を保持してそれを核に門流や教団を創りやすい「教学の論理」と、日々の暮らしに腐心するなかで門流や教団に接近する民衆（信者）レベルの「生活者の心意」との関係を考える必要について、である。

「教学の論理」がどんなに立派なものであっても、それが日々の暮らしに腐心している「生活者の心意」に応じ、彼らの琴線に触れなければ、大きな宗教的なうねりにはならない。「さま」をつけることが不自然である「法」を擬人化してそれに「さま」をつけるのも、木画二像の成仏や久成釈尊によって法が人格化されるからだという「教学の論理」から出てくるというより、「私たちに授益してくださる方は、たとえそれが妙法曼荼羅で象

徴化されていたとしても、すばらしく偉い仏菩薩（人格）であるに違いない」という民衆（信者）＝「生活者」の心意（心理的性向）に根差しているのではあるまいか。

M. ウェーバーの社会学的な宗教運動論の立場からいえば、教学的な「理念」は、受益を求める生活者の「利害状況」がらみの民衆（信者）の心意（心理的性向）と結ばれなければ、大きな宗教的なうねりとはならない。

その意味で、「御法さま」という言表は、「教学の論理」と「生活者の心意」が交差した興味深い事例であろう。

註

（1） 山川智応（田中智学の高弟、本化妙宗連盟の創設者、1879-1956）の「冥合一如」と「不二一如」の概念については、山川智応『本門本尊論』（浄妙全集刊行会、1973年）406-407頁を参照のこと。ここで山川は、「無始の本佛は不二一如をいい、五百塵点劫の始成の佛は冥合一如をいふ」（同著406頁）といっている。この山川の立場からすれば、日蓮遺文の観心本尊抄にある「吾等が己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり」という言葉は、五百塵点劫の久成釈尊が妙法と不二一体の所顕本覚三身仏と冥合し、久成釈尊が無始（常住）性を獲得して「無始の古仏」になる、すなわち、本来、自受法楽だけの立場の本仏（所顕本覚三身仏）が一切衆生の済度のために娑婆世界に和光同塵して、敢えて本因本果の修証の姿（上行菩薩と久成釈尊）を示す、という本覚仏の妙を言表しているのかも知れない。

（2） 日蓮正宗の「人法一箇」については、大石寺中興の祖（大石寺第26世法主）・堅樹院日寛（1665-1726）の著『六巻抄』のなかの文底秘沈抄第二と当流行事抄第三、および、日蓮正宗法華講連合会機関紙『大白法』第478号の「教学用語解説（27）人法一箇（にんぽういっか）」を参照のこと。

（3） 大平宏龍・株橋祐史『法華宗の教えを語る』（東方出版、2001年）、17-18頁を参照。

（4） 同上、21頁。

（5） 一妙日導（綱要導師）は、日蓮遺文の観心本尊抄の「吾等の己心の釈尊は五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏なり」についての「随自意法門とは、所謂る寿量品の文底五百塵点所顕なり」（祖書綱要）といって、五百塵点劫という「文上随他」の時間を文底読みして、久成釈尊所顕の常住仏（無作の本覚三身仏）の存在を認めている。そして、この無作本覚三身仏という「人」と南無妙法蓮華経の「法」との人法一箇についても認めている。だが、久成釈尊から常住の本覚仏に到達する日導・日輝の教学は、妙法曼荼羅の中尊を「人」と「法」に開くという点では大石寺教学と同じであっても、久遠元初という有始の一点に時間を遡って自受用報身（とその末法再誕日蓮）を本仏として立てる大石寺教学とは大きく違っている。

さらに、優陀那日輝は日導の説をさらに進めて塵点仮設の論を立て、「当家既に無始無作を実義と為す。即ち遠成は但だ是れ能顕の巧説のみ」（祖書綱要刪略）といっている。日導も日輝も寿量品の五百塵点劫については「文上随他・文底随自」の立場で一致し、実修実証の文上久成釈尊は巧説で、所顕文底の無始無作の本覚仏を実仏としている。

詳しいことは、望月歓厚『日蓮宗学説史』（平楽寺書店、1968年）第四篇第六章および第五篇第四章を参照のこと。

（6） 生命主義とは、創造主と被造物という二項対立のない世界のなかで、存在のすべてを「いのち」あるもの（神または仏）と認め、それを全体と個別（一と多）・本質と現象とに分け、前者を根源的ないのち（根源的生命＝宇宙大生命）、それを分々に分かち合ったものを後者として捉え、後者が前者との調和的な関係を保つことを「善」、その関係が破綻した状

態を「悪」とし、それが修復されれば「幸福」になって、破綻したままだと「不幸」の状態が続く、と考える宗教的な世界観である。

日本の生命主義は古来のアニミズム的な考え方がベースになっていると思われるが、それに統一性と洗練性を与えたものは、やはり仏教、とりわけ真言密教的な思考法であったであろう。中心の大日如来とその大日如来のいのちを分け持つ末端の森羅万象という曼荼羅的な構図は、日本の生命主義に大きな影響を与えたに違いない。なお、日本の宗教民俗と密教の習合した修験道もまた、台密・東密等からの強い影響下において成立し、日本の新宗教にも大きな影響を与えた。

日本の新宗教の生命主義については、對馬路人・西山茂・島薗進・白水寛子「新宗教における生命主義的救済観」（『思想』第665号、岩波書店、1979年11月）を参照のこと。

（7）　八品派門祖の慶林坊日隆は、その著『私新抄」のなかで、「今経の本門寿量品の五百塵点は斉限有るに似て、三世本有本来常住の五百塵点五百塵点と断絶無く顕本し給うこと無量無辺にして斉限なし。斉限無く無量無辺の五百塵点を束ねて一箇の五百塵点と経には説けり」と述べている。いわゆる「繰り返し塵点」論である。

（8）　大平宏龍・株橋祐史『法華宗の教えを語る』（東方出版、2001年）の120頁で大平は「『一仏二名』と言いまして、法華宗独自のご法門でしょう」といい、株橋は121頁で「上行菩薩は本仏釈尊の本因行のお姿である」と述べている。

（9）　望月歓厚は、「（慶林坊日隆の）この議論は師が塵点仮設論が五百塵数の仮設にして久遠の仮設にあらざるを混同せるにより来れる意見なりといふべし。斯実数説を固守するが故に、報身の常住については繰返しの五百塵点といふ如き説を立てて之を会するに至れり」（望月歓厚『日蓮宗学説史』〈平楽寺書店、1968年〉179頁）と、慶林日隆の繰り返し塵点論を批判している。

（2018. 9. 30粗原稿脱稿）

〈キーワード〉
①　御法さま
②　人法一箇
③　法面人裏
④　教学の論理
⑤　生活者の心意